

2011年 春学期レポート

富田 望

[履修クラス]

EDU 793 Internship at ELI

EDU 713 Language Acquisition & Cognitive Development

LIN 510 First Language and second language

LIN 772 Field Method 2

LIN 745 Language and Culture in Deaf Community

(EDU 793 Internship at ELI)

もっと実践的な経験をもって、日本人の生徒以外にも英語を教える機会があれば良いなと思っていたのが、今回の学期ではEDU 793 Field Experienceというクラスを取るという形で叶った。ELI(English Language Institute)での実習である。EDU 793、このクラスは、特定の単位数や、内容、場所などが固定されておらず、別の言い方をすれば、自分でfield workをデザインできるのだ。特にろう教育学科の学長 Dr. Hileさん、実習がやりやすくなるようにと実習の環境作りには色々と協力を頼んだELIの教師のコーディネーターMs. Buchananさんにはお世話になった。

週2のクラスへの参加と個人教育指導書などの書類作成のお手伝い、ファイルの仕分け、週2回のTutorial Office(ELI)での勤務、金曜日の午後にある教員会議、また2週間に1回の割合で行われるProfessional Development Meetingへの参加がこの実習のおもな内容である。

Co-teacherとしての仕事がまさか早速任されるとはおもっていなかったから、実習が始まってすぐに、会議で次の報告日に私の名前が入ったのには驚いた。日本だったら、実習だからといって、最終日までは実際にクラス内で教えるなどは出来ないし、書類作成などの仕事ばかりが回される所であろう。日課のローテーションが日本より早く、次から次へと早く切り替えをしていかないと、あっという間についていけなくなってしまう。多分、本担任教師並みの忙しさだったかもしれない。

Co-teacherとして参加させてもらっているクラスというのが、Writing and GrammarのLevel 3であり、また文法かと思ったのが正直なところである。Gallaudet大学ではMulti Visual languageという教育アプローチ法に10年前ぐらいから取り組んでいて、

簡単にいうと動詞、主語、冠詞といった品詞の名前をもっと視覚的に、かつ論理的に生徒たちに諭す方法はないかと云って開発されたアプローチ法の一つである。しかし、このアプローチの場合は、教える内容がより視覚的になったというだけで、教える内容そのものが文法にそった規律、ルールなどを学ぶプロセスであることに変わりはない。Visual model of English という別名の名のとおり、四角や三角、青い円形や、赤い円形などで冠詞などを教えていくのである。さらに動詞のあとの目的語には、冠詞-形態詞-名詞-副詞のどれかというふうに選択肢が絞られるように、消去法で、論理的に教えていくから、文法を丸覚えしていくのとどう違うのかと、最初は首をかしげたものだ。それでも学習障害をもった生徒たちに英語を教えていく方法としては、それなりの効果があるようで、実際に学習障害をもっている生徒たちからは、好評の声が多かった。日本でも学習障害をもつ児童たちに英語を教える場合はどんどんこの方法を使っていくことをおすすめしたい。

改めて ELI の Tutorial Office で勤務した時間を思い起こしてみると、あのときはとにかく足りない教材を作ったり、パワーポイントを慌ててクラスの一時間前に仕上げたりと、忙しい毎日を過ごしていたから、あのときは気づかなかったことが改めて思い起こされたりする。例えば、クラスの Observation、クラスを受け持ったことよりも、Tutorial Office で働いたことのほうが、個人的には得ることが多かったことや、六ヶ月という短時間であるのにも関わらず生徒たちの信頼を得ることができたのは Tutorial Office で働いていたからだろうなというようなことである。なによりも“教えることの充実感”を改めて実感することが出来たし、自分もすごく楽しんでいたと認識しなおす。というのは、半年も実習をしていると職場の人間関係や、細かいことが気になってくる。やはり個人の考え方の前に、教育の方針、やり方が合う、合わないで、変にストレスがたまることもあるから、つねに“教えることの充実感”を感じる機会／場所があったこと、そしてそういう場所を自分で作る事ができたことは貴重な経験だったと思う。

実際に私がクラスを受け持ったのは、欠席した教師の分の代理での受け持ちが二回、またインターン上の practice teaching が二回である。教えた内容はというと「数えられる名詞」、「数えられない名詞」、「丁寧な依頼文」、「要求の使い分け」（丁寧な言い方の程度）、「現在完了形」、また「clause を使った過去形」、「現在形の使い分け」などである。Tutorial office では、全体的に中学校から高校までに習う内容に関する質問が多く、またクラス内でクラス担任の先生が教える内容だけではカバーできない内容を細かく指導したりもした。働きはじめて数ヶ月もすると、自分が受け持っているクラス以外

の生徒たちからも個人的に Tutor してほしいという要望が来たりして、その都度、Tutorial Office のスタッフを増やす、またはスタッフの質をあげるなどの要望を伝えたりして、ELI 全体がこういった基本以外のサービスにも手を入れるようにしてなってくれればいいとおもった。

クラスで教えている内容でカバーしきれない内容の例という、例えば “a lot of” のような分離複合語に関する質問で、“a lot of” はどうして “lot” でたくさんという意味合いを含んでいるのに、どうして “a” という冠詞がつくのか？ little と a little はどう違うの？というのがある。この場合は、フォーカスや Construal (私たちの物事の捉え方) などを使って、どのようにオンフォームしているのかを具体的に説明するなど、認知言語学に使われる内容を使って指導していた。これには驚くぐらい自分でも手応えを感じ、担任の先生にも感謝されたことがある。

つくづく思うが、ろう者は抽象的な表現が苦手で、とくに時制の使い分けを理解するようになるまでにある程度の時間を要する。これはネイティブイングリッシュスピーカー以外の聴者にも同様のことが云えるが、ろう者の場合は特にその傾向が強い。他の教師方は使っていなかったが、私の場合は Time line など図を用いて、米国人（とくに聴者であるアメリカ人）の「時間」に対する概念そのものの理解の仕方、またそのプロセスを理解させることに重点をおいた（フォーカスオンフォームの概念を利用したものの一つである）。これが現在完了形など、さらに意味構造そのものが複雑化されている事象を理解することにつながると信じているからである。ELI での実習で驚いたことは多くの教師が TIME LINE を使わないで、現在完了などの時制に関する文法を教えていたことである。だから他に特にこれというアプローチ法、または具体的な方法を使っているのかと聞いたら、それでもないというから、ELI の教師は何をしているのかと驚いたこともあった。

抽象的な概念を理解することが苦手という事に関しては、とくに出生後の発見が聴力障害の発見の遅れ、本来ならば認知能力を発達させるはずの情報がただの表記情報でしかなかったときなど、特定な状況下にて現れるろう児特有の言語修得の遅れ／認知能力の未発達が起こるなど要因は様々であるとおもう。しかしいずれのケースにしても、本来なら言語習得において通過すべき点ところを飛び越しこしてしまったか、認知能力の中でもある分野がある特定の状況の下で延ばされなかったかのどれかである。この事については日本も米国にもそれほど違いがないと感じている。また聴覚障害児／ろう児への教育問題はどこにいても、きちんとしたソースが不足していることによるアプローチの討議などが本来の問題をややこしくしていることが多い。これはこの間、参加した

言語学から手話通訳の問題を探る討論会に参加したときにも感じたことである。

全体として、生徒たちがそれぞれに持っている第一言語が異なっている面、生徒たちの言語能力／認知能力にばらつきが見られる点（あまりにも教育背景が異なるため）が ELI の生徒たちの主な特徴であるとおもう。ELI プログラムにいる生徒たちの平均得点、とくに言語能力、また認知能力のばらつきについては、その差異がどれほどあるのかという点について Professional development hours でも議論のトピックとして取り上げられたし、とくに ELI の現時点（2011年、春）の試験／判定方法では限界があることは、たとえ言語能力と学業能力がセオリー上で深い関連性を持っているとはいえ、この二つを別々に判定する試験が必要であることは明らかである。今後の試験方法について、再検討するべきであろう。最後に聞いた話では、その方向で改正していくつもりだとう話を聞いている。

（教育学部と言語学部から

ろう児／難聴児の言語習得過程について、感じたこと）

今学期はろう児／難聴児の言語習得過程について、教育学部からは EDU 713 Language Acquisition and Cognitive Development（言語習得と認知力の発達過程）、そして言語学部からは LIN 510 First Language and Second Language（第一言語と第二言語）を履修した。

<言語学と教育学の視点の違い>

上記のクラス以外にも大学院に入学してからというもの、教育学部と言語学部の間を行き来しながら、言語、言語習得過程、発達過程、手話のしくみ、ジェスチャー、教育メソッド、などと教育に関わる様々なトピックに関するものを履修してきたことで、改めて実感したことであるが、教育学と言語学とでは用語の使い方に違いがあることを強調したい。例えば、バイリンガルという用語においても、言語学と教育学とでは意味合いが微妙にちがっている。

見方の違いでまとめるよりも、その用語の用途目的が学部によって異なっているといった方がじっくりくるかもしれない。例えば、教育学部ではバイリンガル という用語は子どもを取り巻く環境、具体的には家族、学校が使用する言語などの要素が主体になるという考え方から、教育アプローチ法の一つとして使用されることが多い。例としては、日本のろう教育界ではちょくちょく紹介されているカミンズのバイリンガルセオリーがある。彼のセオリーは、認知力の発達が児童の言語習得に影響を与えるという見方に基

づいており、CALP（認知学力言語能力）/BAIS（基本的対人伝達スキル）の重要性を説いている。この2言語相互依存関連性を補強することが重要だと説いた彼のセオリーが、教育アプローチ方法の一つとして取り入れられ、そして普及されたのが米国、また日本のろう教育界で行われている bilingual /bicultural 教育である。だから言語学というバイリンガルの意味とはまったく違った意味合いを持っているのである。

これに対し、言語学における言語習得の分野では、「一つ以上の言語がある環境」という概念そのものが形容詞化され、特定の意味から広範な意味にも使われている感じが強く、基本的に特定のグループ（0-5歳の間に一つ以上の言語を学んだ子ども）などを指すとき、また、一般的な意味での、一つ以上の言語を使用する人という意味でバイリンガルという用語が使われる。このように、一つの用語ひとつにしても、分野によっては、その用語が持つ意味具合そのものがまったく異なっているのだ。

本題にはいり、米国のろう児／難聴児の言語習得過程に関するリサーチにざっと目を通してみると、言語学からのセオリーをもとにアプローチを探る、またはアプローチ上の理論的枠組みなどについて話していたりする。そして、言語学で使われている用語を、また違った意味合いで使用していたり、定義そのものが曖昧だったり、データの解析方法（手話言語を分析するため、ある程度の知識は必要）などに穴のあるリサーチが少なくないことに気づく。有名な9歳児の壁セオリーを提示した研究にも、データの解析方法に疑問があり、果たしてろう者の言語能力が本当に九歳児レベルにとどまっているのかすら怪しい。このことは後に著者も認めている。（注：著者はギャロデット大学の教授で今も勤務している）

このように言語学分野で検討されるべきである内容、とくにデータの分析法、また解析方法については教育学の中ではまったく留意していないアドバイザー教授（いったい誰が modality の差異について思いつくだろう？）が多いため、近年までの教育学のリサーチには穴が多いことを留意しておきたい。10年前以降のリサーチからは激減しているし、近年の bimodal に関するリサーチには目を見張る面白さがあるから、近年のリサーチを中心に読んでいくほうがいい。

<ろう児／難聴児に関わる教員は、皆ランゲージプランナーである>

ろう児／難聴児を相手に仕事している教員ならば、必ず確かな情報をもとに、確かなリサーチをもとに親にアドバイスしたり、また専門の人に相談し、アドバイスを伺ったりするだろう。クラス担任の教員は個人計画指導書の作成から、学習指導案の作成、連絡、報告などと、次から次へと仕事がかかるので、やはり個人的に色々と調べてみるのに

は限界があるだろうと思う。言語能力の発達の査定結果だけに限らず、会話や、言語習得のプロセス、生徒たちの第一言語から認知能力の発達の審査も必要であることは EDU 713 Language Acquisition & Cognitive Development で学んだ。言語力による言語発達過程の流れのみに限らず、認知力における発達過程の流れを念頭に入れ、そのアセスメント、配置の判断を下すトレーニングがこれからの教員には必要だ。

第一言語の言語習得には早期教育期間にどれだけ、言語への接触があったのかどうかに関わっていることは研究で明らかにされていることであるが、これをどうやって教育につなげていくのか？これは簡単である。児童を取り巻く環境からコミュニケーション能力を分析することである。しかしろう児／難聴児の言語から認知能力の発達が正常になされているのかどうかの査定は書記言語で行われることが多く、実際のところ児童の認知能力がどれくらいあるのかどうかは教員たちにも専門家にも分かっていないことが多い。この主な要因として児童の言語モードがそれぞれの環境によって異なっていること、査定する人が児童のコミュニケーションモードと異なっていることが挙げられる。いわば、米国人が中国人の中国語の言語能力を診断するようなものだ。

こうして改めて、出来る限り様々のモードを持ちいるろう児／難聴児をおもいうかべてみても、最低でも5つの異なったモードのコミュニケーションメソッドが思い浮かぶ。いずれも、一般的な基準からみると特殊なことであることに変わりはないが。まったくろう児／難聴児は特殊な環境におかれて育っている。この状況を考えると、両親以外に、児童の言語発達プロセスに注目し、それなりのアドバイスをとることができる人という、やはり学校を中心に働いている人々となる。

そこでミニケース プロジェクトから学んだことが、この対策のヒント、もしくは解決の糸口まではいかなくても、概念的に応用できるかもしれないと感じたので、あえて学んだ内容を明記しておきたい。

ミニ ケースレポートというのは、その名の通り、グループごとに様々なケースを抱えた生徒たちの情報 (description/描写)、またビデオテープ (対話式インタビュー) が配付され、1. language assessment、2. cognitive ability、を仕上げるのがはじめの仕事であり、1,2 をベースに日本で云うところの「細かい」個人指導書を仕上げるものである。なぜ専門家の診断が入れば良いところをなぜ、教員たちがわざわざ1,2 を仕上げなければならないのかという意見が出てきそうだが、教員たちがわざわざ生徒たちを観察して認知力はどれほどなのか、言語能力と比べて、比例的な数字であるかどうかという判断ができるようになるという過程が必要なのである。またこの事が実際に専門家の診断が必要かどうかの判断基準にもなる。

私たちのケースは①難聴、②スペイン語が第一言語、③母子家庭であった。まず年齢的にもこれまでの診断書のケースなどを見ていって、障害が診断された日はいつからとか、父親が事故で亡くなったのはいつからとか、周期的に重大な出来事に注目すること、前歴の診断の見直しなどからはじめた。この方法の良いところは、認知力の診断も入っているから、児童の優勢モードの種類に結果が左右されたり、前担任の評価や、言語能力のみの診断で判断されることがなく、常に指導案の見直しがしやすいところである。

このようにろう児／難聴児を相手に仕事をする教員に考える力をもたせる、教員が自分である程度の児童の言語力、認知能力をはかることができるというのが、このメソッドの強みであり、書類記入の仕事で終わるのではなく、language planner として、計画をたてて、児童の頭の中にある言語を言語として育てていくことがメインの目標となっている。この方法は日本でもぜひ取り入れてもらいたいと考えている

LIN 772 Field Method 2

昨年のフィールドワーク 1 に引き続き履修しているこのクラスでは、今まで通りのデータ収集と分析に集中していた。サウジアラビア手話には特殊な hands internal movements があり、形態素の一つとしての機能があるというような内容のことをやった。サウジアラビア手話にはアメリカ手話やアジア分野ではみられない手指同士の動きがあり、その分類にあわせてのデータ収集とその分析にほとんどの時間を費やした。

このリサーチには Dr. Robert 氏のアドバイスを頂きつつ、かつ final paper を仕上げることが出来るまでには仕上がった。この内容は 2012 年の Sign Language Studies の研究寄稿として発行されることになっている。

LIN 745 Language & Culture in Deaf Community

このクラスは言語学というよりも人類学である。2 週間に一回のレポートは厳しかったけれど、学んだ内容もそれなりに濃かった。様々なリサーチメソッド方法、議論の方法を学んだあとには mini-research があり、生徒たちが各自それぞれのテーマにそってリサーチをすすめて、そして分析することになっていた。私のテーマは” Identity and language in Japanese Sign Language” である。データ分析といってもすべてのデータを分析するのではなくて、数字から出されたデータを解析したり、興味深い手話を pick up して分析するようにと指示されていたから、ページ数も少ない方でだいたい 20 ページぐらいで終わった。リサーチは Field Method の方で余裕がなかったから、このリサーチはあまり深くした分析ができなくて残念におもっている。いつか機会のあるときに、

このトピックにもどってリサーチが出来たらなとおもっている。

卒業して

“LOVE and HATE” このフレーズは私がギャロデット大学を卒業してどうだ？と聞かれたときに、つい口からでたのである。なにを隠そう私自身が一番驚いた。いやいや、一番驚いたのは “LOVE” というパートである。

“LOVE and HATE” こうして改めてみると、いやはや強いニュアンスをもつフレーズではないか、好きだけど嫌い、嫌いだけど好き、どちらも同じようで違う意味合いがある。いや、同じか、、、というような心の葛藤が聞こえてきそうではないか。

まったくそのとおりである。私のギャロデット大学での院生活はまさにこの通りであった。教育学と言語学のはざまでゆれながら、聴者とろう者のはざままで宙ぶらりんになりながら、必死に学業だけをこなしてきたという感じだろうか。私があえて、聴者とろう者のはざまと強調したのは、言語学部における私のステイタスのせいである。言語学部に所属していた私以外の学生は聴者であった。「普通」という言葉の定義が優勢数によって決められるならば、私はまさに「普通ではない学生」であった。ギャロデットでは、ろう者がやっと、「普通ではない」という聴者の云う社会的な枠組みに埋め込まれているラベルから脱功できる場所であるという。皮肉にも私はギャロデットに入学しても、まだこのラベルから脱出できなかつたのである。誤解しないでほしい。私はギャロデットでの生活を楽しんでいなかったわけではない。しかしギャロデットに入学することに決めたメインの理由が、皮肉にもこの二年間では得られる事ができなかつたのである。

卒業式に名前を呼ばれ、教授たちの前にたって喝采を浴びたときの私の顔や髪はお世辞にもこざれいにはしていないとは云えなかつた。卒業する一週間前まで徹夜でレポート作成していたせいである。徹夜で作業をするのは仕事であるのように、ラボに通った。言語学のクラスメイト達と議論を交わしてしているときが一番たのしかった。教授には数えきれないほど締め切りを延ばしてもらうお願いをした。思い起こせば私の二年間は、充実した(?) academic life であつた。逆にいえば「普通ではない」ということはたいてい悪いことではないだろう。逆に普通の見方というものがわからないし、別の視点を持っている事で希少価値が生まれることもあるからだ。

それでも “LOVE” という言葉がくちから次いで出てきたのには驚いた。ある人に云われたことだが、それがふと、頭の中に浮かんだ。ギャロデットは離れる時、その場を去る時にやっと心のふるさとになる、と。まだ私にはこの意味がよくわからないのだけれど、いつか実感する時がくるのだろうか。LOVE という言葉が口から自然に出たように。